

望海楼：南海の大勢に逆う者は、必ず自滅する

丁剛

2012 年 1 月 16 日 00:00 ソース：人民網（人民日報海外版）

最近、南海問題に関する会議が米国と中国ではほぼ同時に開催された。一つは北京で開催された中国と ASEAN の「南海各国行為宣言」に関する第 4 次高官会議で、もう一つは、10 日にワシントンで開催された米国シンクタンク米国安全センターが主催した南海戦略報告会である。この二つの会議を対比すると、将来の南海問題の焦点の所在が分かる。

北京で開催された会議において、中国と ASEAN 10 ケ国高官及び ASEAN 事務局官員は、「南海各国行為宣言」を推進するため意見交換を行い、すでに合意した一部の協力事業の実施について一連の共通認識を得た。この会議が開催されたことは、現在南海の情勢が全体として平和で安定しており、各国が協議を通じた問題解決を求めていることを示している。

これに比べ、米国で開催された南海会議は、平和な雰囲気は全くなかった。米国マスメディアが伝えた情報によると、ワシントンの一部の人々は、「南海の情勢は安定を失い、米国が排除されつつある。急いで何かしなければならない」と焦りの雰囲気が充満していたという。

会議で発表された南海戦略報告によると、「南海は、西太平洋とインド洋の間の”咽喉”であり、グローバル化と地縁政治の”衝突点”である。米国が 21 世紀のアジアを指導できるかどうかを決定的にする要素は、戦略的に最も重要な南海に関与することである。米国海軍作戦部部長グリーンナートは、会議の席上で”我々は、発表された国防戦略指針に我が海軍の戦力を対応させなければならない。我々の分析では、西太平洋の米国海軍は依然として強大な戦力を保持している”と述べた」と。

米国は、将来どのように南海問題に介入しアジアを指導しようとするのであろうか？報告書は、「米国をリーダーとする多角的なメカニズムを建設すべきである。南海における中国の”覇権”獲得に対応するため、米国は南海問題で新たな安全パートナーネットを組織する。この種の新たな安全パートナーネットは、”ハブ アンド スポーク方式”であり、”米、日、韓、オーストラリア、フィリピン”を含む一種の聯盟形式でなければならない」と提案した。

これらの提案は、米国が南海を取り仕切るべきであるとの意向を強く示唆している。これはまるで数十年前の冷戦時代の旧聞のように聞えるが、しかし 21 世紀の今日確かに起こっていることなのだ。南海問題では、中国が覇権を握っているのではなく、明らかに米国が握っている。自己の規則で世界を牛耳ること、世界の規則を自己の規則に服従させること、これは覇権主義の共通の特性である。最近、米国は、中国、シンガポール、及びアラブ首長国連邦のイランと石油貿易を行っている会社に制裁を科した。これが典型的な例である。

今日の南海地区は、冷戦時代とは大きく異なっている。発展することが南海周辺国家の第一の希望であり、この地区の共通の願望である。南海地区の如何なる国家も南海の争いで発展を阻害されたくはない。このような共通の願望があるために、皆が一緒に南海での協力を話し合うことが出来る。協力しあうことは、必然的に将来の平和解決及び新たな規則を制定する良好な雰囲気を作る基礎固めになる。

米国は、南海の周辺国家ではないが、南海に利益を有している。この点は、我々も否定しない。米国は、南海問題の討議には参加できるが、南海問題の解決を主導することはできない。一面から見れば、米国はもはやそのような実力は持っていない。中国の勃興が南海周辺国家にすでに提供したもの、或いは将来提供するものは、米国が現在或いは将来とも提供することはできない。別の面から見ると、南海周辺国家は、もはや冷戦時代のような”アンクルサム”（注：アメリカ人の蔑称）の世話を必要としない。この地区において、中国と対立する集団、ネットワーク、或いは”盟友圏”を寄せ集めたりする戦略の試みは、区域の発展の大勢に逆らうものである。この地区の国家は、意志表示することを望まない。彼らは米国を採るか中国を採るか迫られている。

米中で、ほぼ同時に行われたこの二つの会議は、南海問題の複雑性を反映した。米国は、この地区の戦略的主導権を輕易に放棄しないことを認めるとともに、目的を達成するために更に多くの難題を持ち出そうとしている。しかし肯定出来ることは、米国がこのようにすれば、自ら造りだした難題にますます直面するようになるということだ。つまるところ、我々は、すでに”覇権後”の新時代に入ったのだ。

作者：人民日報高級編集

以上